

シュメール語は日本語，アルタイ諸語と同系か：その1 総論・音韻の比較

板橋，義三
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/4294>

出版情報：言語文化論究. 4, pp.37-45, 1993-02-19. 九州大学言語文化部
バージョン：
権利関係：



シュメール語は日本語、アルタイ諸語と同系か

—その1 総論・音韻の比較—

板橋 義三

§ 0 序 説

昨年、日本で“Sumerian and Japanese”という大変面白そうな本が出版された。この著者、Roger Ahlberg(日本名：吉原良讓)は在野の言語学者であるが、シュメール語、韓国語、古代日本語を独学で研究され、その系統関係を模索している方であると聞く。この著書は比較言語学の方法論においては決定的な不備であるところも割に少なく(ある日本人言語学者が犯すような誤りは多々あるにしても)その点においては評価して良いと思うし、また、その意味からもシュメール語と日本語の比較研究は討論がなされても良いと考える。さらに、最近では下記に述べるようにシュメール語をノストラティック語族に含めるという新しい視点が出て来ていて、その語族の中に日本語の中で非常に厚い層を成していると考えられるアルタイ諸語も含まれ、その点ではなおさらのこと、ここでシュメール語と日本語の系統関係の有無を論じる必要が出て来たと考ええる。

拙稿では上述の著書を主にその対象としてシュメール語は日本語、ひいてはアルタイ諸語と同系関係があるのかどうかを見ていくが、最後に結論としてその関係はほとんど無いであろうということを証明して行きたいと思う。

§ 1 これまでのシュメール語の系統関係

シュメール語は膠着語であり、また、メソポタミアという地理的位置からシュメール語との類型的共通性はないと見られるセム語族や印欧語族に包囲されており、シュメール語は元来孤立語であると考えられて来た為、その系統関係は論じられて来なかった。

しかし、高楠順次郎が1944年に「知識民族としてのシュメール族」という著書を出版したが、その著書の言語の章ではシュメール語をメラネシア語、ムンダ語、インドネシア語、モン・クメール語と比較しているが、日本語との比較はわずかであり、その語彙は無関係である語彙がほとんどである。また、これは語彙だけに終始し、文法的な特徴は全く比較していない。そのため、この言語の章の比較語彙は考慮されなかったのは勿論のこと、この著書自体が全く顧みられなかったのである。

1960年代になると、デンマークの有名な言語学者ペデルセン(H. Pedersen : 1962, 388)がノストラティック諸語という仮説の語群を命名し、その中にはセム・ハム語族、印欧語族、ウラル語族、ドラヴィダ語族、そしてアルタイ諸語、さらに遠い親縁関係があるとするシュメール語も含めている。同年代にメンゲス(K. Menges : 1968, 巻末図表)やイリイチースヴィティチ(V. M. Illič-Svityč)らも同じ語群を1つの壮大な語族であることを主張している。

1980年代には、クロード・ボイソン (C. Boissen : 1987, 1988) がシュメール語とドラヴィダ語族の関係を、その語彙数は少ないが、語彙のレベルで取り上げ、印欧語族、セム・ハム語族、コーカサス諸語、ウラル語族、ドラヴィダ語族、アルタイ諸語、シュメール語などを内包する壮大な語族の集合体であるノストラティック語族の枠組みの中でその比較された語彙からドラヴィダ語族との同系関係の可能性があると述べている。

1990年代に入り、ボンハード (A. Bomhard : 1990) はボイソンのシュメール語とドラヴィダ語との関係を基にノストラティック語族への帰属をさらに推し進めている。従って、これまでは言語学的レベルすべてにおいて、シュメール語の系統関係を取り扱った論文、著書をなかったと言って良いと考える。

§ 2 Ahlberg のシュメール語の系統関係

Ahlberg (1991) はシュメール語に関する資料やシュメール語学者の論文や著書などは現在非常に少ないので、現段階ではシュメール語と日本語との系統関係を細部に渡って証明することはできないが、音韻レベル、語彙レベル、そして文法レベルまでは比較可能だとしており、その比較を概略的に行ったのがここで主に論ずる著書である。将来、双方からの文献の出現によって、さらに、詳細なレベルに渡り討論がなされ、シュメール語と古代日本語との系統関係を確立することができるだろうことも Ahlberg は暗示している。

Ahlberg は音韻、文法、語彙の3つのレベルから日本語との比較を試みている。どのレベルにおいてもその音韻対応があり、さらに、それを基にした形態論上の対応が見られるならば、それは一大発見となり、シュメール語と日本語は同系関係にあると断言できようと思う。しかし、この著書の比較項目をそれぞれ詳しく分析していくと、それとは

全く反対のシュメール語と日本語には系統関係などないという結論に至る。拙稿ではまず Ahlberg の系統関係を表すという証拠を1つずつ順に見て行くことにする。

Ahlberg の理論それ自体を批判することが順当なやり方であると思うが、それと同時に筆者自身の考え方を述べることも必要なことであると思う。即ち、筆者自身の理論を理由に氏の理論を非難することは批判の仕方としてはかみ合わないし、氏の理論を正当に批判したことにはならない。(この類の批判は残念ながら、かみ合わないながらもなされているのである。例えば、安本美典 (1990) の「朝鮮語で万葉集は解読できない」がその好例である。) 従って、ここでは氏自身の理論を批判し、さらに筆者自身の理論を展開して行きたいと思う。

§ 3 シュメール語と日本語の比較

(1) 序

シュメール語の歴史的背景の概略を Ahlberg は述べているが、その中でシュメール語と日本語の間には地理的位置や時間的隔たりが大きい、ある過去の一点でその両者の共通の親に当たる言語、即ち、共通祖語が存在したとすれば、日本という地理的位置や地形はその祖語を保存するには格好の場所であったと考えられると述べている。これは言語学的な見地ではなく、歴史学的、かつ考古学的な見地なので、これに対する意見は、まず第一に、中央アジア、東アジアの民族の興亡や移動は極めて広い範囲にわたって行われたと同時に非常に流動的であったと考えられるので、もし、シュメール語と日本語との共通祖語を話した民族がアジアの西部より日本に大移動したとすると、その途中で陸経由でも海経由でもたくさんの異民族との接触があったに違いない。そして、日本に漂流して着くまでにはその人数も非常に少なかっただろうし、そ

の少数の人間が果たして日本で生存できたかどうかははなはだ疑問である。即ち、もし、陸経由で来たとしたら、多くの他民族に滅ぼされるか、同化してしまっていたであろう。また、海経由であるなら、ある農耕文明をもった民族が果たして何千キロもある海を渡る造船技術をもっていたであろうかという素朴な疑問が浮かび上がる。こういった疑問はだれもが持つ基本的なものであろう。つまり、考古学的か歴史学的見地から見て、シュメール語と日本語の同系説は非常に大きい壁があるといわなければならない。ただ、もしこの説を支持するとしたら、それはアジア大陸のどこかでシュメール語と同系の言語が発見されたというような仮定的な場合であり、その場合にはこの説の可能性も一概には否定できなくなる。

上述したような問題点は最近下火になったタミル語と日本語との同系説にも当てはまるのである。しかし、このタミル語の場合はシュメール語と比較して距離的に日本により近いことで陸海のどちらの経路においても日本に到達するまでに他民族に滅ぼされ同化してしまったということも考えられる。その場合でもそれを検証するだけの文献が存在しないので、明快な答えは出せない。この意味において歴史学や考古学の枠組みだけでは系統関係を論ずることはできない。

Ahlberg は比較の方法としてシュメール語の語彙を古代日本語、現代方言、現代日本語の中の少なくとも1つと対応させ比較しているが、一般に比較言語学では古代日本語と方言形を含めた現代日本語との両形から内的復元を行った後でシュメール語とその復元形を比較するのであって、その意味では無闇やたらに現代方言とだけ比較するのは避けなければならないし、実際そのようなことをしているのでその点は避けるべきであった。確かに、日本語の中には方言形の方が古代日本語形よりも古形を残していることがあるが、そ

の方言形がその方言地域で新しく形成されたという場合も多い。その場合には他の方言形や古代日本語形も考慮して比較しその方言形が古形なのかどうかを判断しないといけないのであるが、Ahlberg はそれを全くしておらず、またその方言形とはどの方言形を指すのか明らかにしていないだけでなく琉球語も方言形の1つと考え、それを全く明示せず、あたかも単なる方言形の1つであるかのように示している。さらに、Ahlberg は比較方法で語彙の比較をしているのみで祖語形は全く復元はしておらず、その点は問題になるところである。

この点は言語学者でさえも陥る陥穽であるが、それは多言語比較をせずにシュメール語と日本語の比較のように二言語のみを取り上げて比較すると言う誤った比較の方法である。この方法では借用語の可能性が高い語の選別がほとんど不可能になるという難点がある。

シュメール語と日本語での借用の可能性は例えば、日本語と韓国語の借用の可能性というような地理的な近さから来る借用の可能性の種類とは異なり、それはむしろ周りの印欧語やセム語からの借用として使用されたシュメール語祖語の中の語彙が日本語と比較されるといった可能性である。即ち、地理的時間的な隔たりがシュメール語と日本語との両言語間の借用を不可能にしたが、その代わりにシュメール語の中に周囲の他の語族からの借用が存在することはまちがいないと考えられるし、もし、それらの語と日本語とを比較しその音韻や意味が似ていたとしても、音韻対応をなす同源語とはなり得ないのである。それはあくまで借用である。

Ahlberg は両言語の類似点として次の8項目挙げている。

- 1) 膠着性：語の単位や要素が他の要素と結合するときその語自身はほとんど変化しないかまたは全く変化しない。
- 2) 語順：文の基本語順は SOV である。

文法要素の多くが音、意味／機能、文中の位置において対応する。(前置詞や後置詞など)

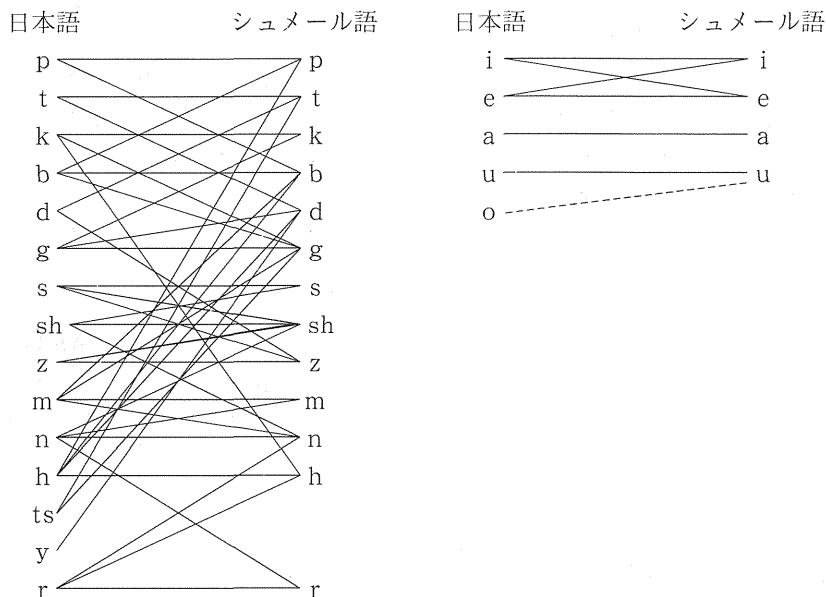
- 3) 両言語において同音異義語が多いことや異なった程度ではあるが、母音調和がある。
 - 4) 両言語は接続詞をほとんど使わない。(例：来て、見て、征服した。)
 - 5) 強調以外は複数形は使わない。
 - 6) 名詞、形容詞、動詞においてその形態的相違はほとんどまたは全くない。
 - 7) 代名詞はほとんど使われない。
 - 8) 性に関する形態的相違はない。
- 1) から 4) までと 8) は類型的類似点であり、シュメール語と日本語が系統関係があることの決め手になるものではない。即ち、この類似は必ずしも系統関係によって生じたとは考えられず、それはその類似が永久不変のものではなく、通時的に変化し得るものであるからである。5) は古代日本語には集合体を表す形態素があるが、単数／複数の区別を表す形態素はなかったのでシュメール語とは異なる。6) においては両言語に共通する。7) では古代日本語の代名詞はよく使われた。以上のことから管見では全く類似が認められないものやある程度の類似があるにせよその類似が系統関係を示す決定的なものとはなり得ない類型的類似までである。従って、Ahlberg が言うような 1) と 3) の類似性だけを強調して日本語とシュメール語はアルタイ諸語に属するとすることはできない。即ち、Ahlberg の結論はあまりにも早計といわなければならない。この結論の前提にあるのは次のことであろうと考えられる。
- 1) アルタイ諸語といわれる語族、即ち、モンゴル諸語、トルコ諸語、ツングース諸語は系統関係がある。
 - 2) 日本語がアルタイ語族の言語の 1 つである。
- しかし、この前提は現在はまだ確実なもの

考えられていないし、特に、2) においては日本語にはアルタイ層はあってもアルタイ諸語の一つとして考えてよいかどうかは非常に疑問の余地の残るところである。即ち、アルタイ層のほかにオーストロネシア層がほぼ確実にあると考えられると共に他の語族からの借用なども十分考えられる。その意味では混合言語説やオーストロネシア語族基層説やクリオール説や文法形態素の借用などの可能性も十分考えられる。

最後に比較の基準として日本語では開音節を基準にして比較しているが、実際には閉音節の語幹も多く存在し、その音節一つの有無で比較できるかどうかが決まることがある。即ち、問題なのはどこまでが比較すべき語幹なのかということであり、その点は全く検討されていない。日本語では特にどこまでが語幹なのかは決定しにくいところがあるが、比較する音節が一つ多かたり少なかたりするというだけで比較可能になったり、ならなかつたりするのである。従って、音節の切り方しだいでは全く比較不可能であるような単語も比較可能になる可能性が出てくるため、偶然の一致ということも排除できないことがある。比較語彙は大野晋(1980)が行ったようなタミル語との比較のように、一般的に意味が不明な語や非常に特殊な語だけを取り上げ、それをシュメール語と比較するという方法をとっている。これではこじつけととられても仕方がないと考えられる。意味が明確にわかっていて、しかも出現頻度が高く借用可能性が低い基本語彙(名詞、動詞、形容詞)を比較することを基本としなければならない。

(2) 音声・音韻の比較

まず音韻表記法の問題であるが、語彙すべてが大文字で示されており(例えば、/ʃ/を/SH/で表しているが、これはまた語の中では/s+/h/の二つの音素とも見ることができ), これではその語彙が音素を



あらわすのかあるいは文字そのものをあらわすのか混同しがちであると同時に、事実、音韻表記と文字表記が混同されている。また、このような表記法では時にはどの部分が音素なのか判然としない場合が出てくるし、特に音節の区切りは語根の比較をするときに非常に大切になる。即ち、語根でない部分も含めた誤った比較では時として偶然にも音韻対応が見られることがあるからである。従って、文字表記と音韻表記を区別し、例文はすべて音声表記を使用し記すべきである。

次に、音韻対応を見てみると、Ahlberg はシュメール語と日本語の両語の母音と子音の対応は行っていないが、頻出語彙を調べてみると、音韻対応は上図のようになる。

この対応表を見ると、1つの母音、1つの子音が相手の言語の少なくとも2つ以上の異なる母音や子音にそれぞれ対応していることが分かる。1つ1つの音についてどのような環境の時その対応音素がそれぞれ起こるのかを詳細に述べなければならないが、それが全くなされてない。また、この音韻対応が疑わしいのは1つの音に対応する音が多すぎ

ることとその音とその各々の対応音との音声的相違が大きすぎることである。例えば、シュメール語のnを取ると、それに対応する日本語の子音はm, n, r, shの四つであるが、まず、その4つという変化音数が多いと言うことである。そしてシュメール語のnと日本語のshの調音法、調音点における隔たりがあまりにも大きいと言うことである。さらに、シュメール語の祖語のnがどのようにして例えばshに変化したのか、あるいはシュメール語と日本語の共通の祖語に別の音素が存在していてそれから各々シュメール語の子音nと日本語の子音shなどに变化したのかなど全く言及がない。

もう1つ大きな問題はこの音韻対応から祖語の音韻体系の復元が行われていないことである。祖語の音韻体系の復元することの意味はその体系から各言語の体系に至るさまざまな変化を合理的に説明するものであるが、それ以前の段階である音韻対応の説明が合理的になされることはないであろうから、祖語の音韻体系を復元するのは無理であると言えるだろう。

Ahlberg は古代日本語に /tʃ, h, dʒ, ts/ の音素が疑いなく存在したとみているが, /ts/ の音素は /s/ と共に存在した可能性があり, それは稲荷山古墳の刀銘文の漢字の読みから /ts/ が存在したであろうと考えられる。ここで問題なのはこの音素を疑いなしに受け入れていることであり, この音素は偶然にも存在した形跡があるので問題とはならなかっただけである。また /tʃ, dʒ/ は古代日本語では /ti, di/ の非口蓋音素であり, そのことは一応述べているものの, この口蓋化した音素を比較すべき音素として挙げていることが大きな問題点である。さらには /h/ は現代日本語にのみ存在するものであるにもかかわらず, 比較すべき音素として挙げてある。この音素は古代日本語では両唇音 /f/ かまたは /*P/ に溯るから, その古代日本語に存在した音素 /f/ か /*P/ を使うべきである。まず基本的にしなければならぬのは古代日本語にどんな子音が存在したのかを確認し, それから古代日本語以前の音韻体系を復元することである。このことはシュメール語にもそのまま当てはまる。従って, この著書で行われているような古代日本語と現代日本語の両者を含めた言語を単に比較する方法ではその比較はあまり意味をもたないことになるし, 特に古代日本語に存在した音素で現代日本語では変化しているものを現代日本語の音素で表わし比較しても無意味である。例えば, 現代日本語の /h/ をシュメール語の対応すると思われる子音と比較するようなことである。

古代日本語には母音は 8 種類存在していたというのが定説であり, それは万葉仮名の特殊仮名遣いの発見により母音の数も定まったものである。即ち, 古代日本語には現代日本語の 5 母音の他に三種類の母音 /i̇, ė, ȯ/ が存在したと考えられる。しかし, Ahlberg は現代日本語の 5 母音の他に次の 3 母音 /yi, ye, wo/ が古代日本語に存在したと考えて

いるようだが, この母音の表記は音韻表記なのか文字表記なのか判然としない。即ち, それぞれが一つの音素として母音の種類を表そうとしたものなのか, あるいはただ単に半母音と母音からなる二つの音素の結合したものを表しているのかよく分からないのである。しかし, Ahlberg は /wo/ を /u + o/ と考えていることから, これらは順に 50 音図のヤ行とワ行の音を表したものと考えて差し支えないと思われる。即ち, この Ahlberg の 3 母音は古代日本語に存在した 3 母音とはならぬ関係がなく半母音と母音の結合した音節を表わしているのである。従って, この Ahlberg の 3 母音の比較については信憑性がないと言える。

Ahlberg によるとシュメール語には基本的に母音が 4 つあり (/a/, /e/, /i/, /u/), この他に一般には現れないが, /o/ が存在したという。しかし, シュメール語学者 (Thomsen, 1984) の考えでは一般にシュメール語には /o/ は文献資料に現れることはなく, この母音は存在しなかったと考えてよいと思われる。ここで Ahlberg がどうして /o/ をもちだしたのかはよく理解できないが, 多分現代日本語の 5 母音がシュメール語に全く同値の 5 母音が存在していたとすることがもっとも都合のいいことであつたと考えられるところから /o/ を持ち出したのではないかと思われる。さらに /o/ を持ち出しておきながら, 古代日本語との関係で古代日本語の音価と現代日本語の音価を混同しているため, 古代日本語には存在しなかった長母音 /ō/ を引用し, 実際その当時にそのように発音されていたかのように述べ, その本来の音は 2 つの母音 /a/ + /u/ からなっているので短母音 /o/ が本来存在しなかったのではないかと考えている。確かに連続母音の結合の結果この短母音 /o/ を生じたと考えられるが, それがまず始めに長母音 /ō/ になってからそ

の後短母音／o／に変化したとは考えられない。つまり、長母音は古代日本語には存在しなかったから、その発音は当然当時の表記されていたように発音されていたのである。即ち、母音間には子音または半母音があり（VCVまたはVw/yV）、その子音や半母音が発音されていたためにその語全体の発音が異なっていたので、長母音は本来の音素ではなく古代日本語以後にその子音や半母音が脱落し、その前後の母音が結合することによって生じた音素である。また、この母音の連結によってできた短母音／o／の他に本来の母音／ö／が古代日本語に存在していたので、シュメール語との母音の比較ではこの点が大きく異なる。

Ahlberg は古代日本語にないシュメール語の音素として／l／を上げ、その日本語における反射形は／r／と／ʃ／であるとしている。またその逆にシュメール語にない古代日本語の音素に／tʃ, dʒ, ts, w, y／の3子音と2半母音、そして矛盾していることに母音／o／を挙げている。一般にアルタイ語の／l₁／と／l₂／はそれぞれ古代日本語では／r／と／ʃ／に対応することがあり、その点では Ahlberg の挙げた S. /l/ : OJ. /r, ʃ/ という音韻対応は理解出来るが、ここで挙げているシュメール語の語例ははたしてアルタイ語との音韻対応の規則性がみられるものであろうか。例として、次の2つであり、非常に実証に乏しいだけでなく、

S. li' 空気' : OJ. ʃi' 息, 風' ;
S. agal' 裕福な' : OJ. agaru' 栄えている'

これらの例は日本語に対応例も含めてアルタイ語の中に比較出来る語はない。ここに挙げている古代日本語の対応例の前者においての' 息' と後者の意味' 栄えている' は Ahlberg の創作によるものと思われるのであり、正しい意味ではない。

古代日本語には口蓋音／tʃ／と／dʒ／は存在しなかったのであるから、Ahlberg の挙げたこれらの口蓋音は古代日本語の音韻とは全く無関係でありここに挙げるべき音ではなかったはずである。実際にはそれらの非口蓋音／ti／と／di／が存在したので、これらの非口蓋音を挙げるべきであった。また、／ts／に関しては／s／と同様に古代日本語に存在した蓋然性があり、そのことに関しては音韻対応のところすでに述べたのでここでは省略する。半母音の音素である／w, y／は共に古代日本語以前から存在していたと考えられ、事実その痕跡がある。それに対して、シュメール語の／w／は／b／が弱化したものなので、S. /w/ と OJ. /w/ は直接比較するのではなくいつそのこと S. /b/ と比較したらよかつたであろう。

Ahlberg はシュメール語と日本語にはそれぞれ同種同数の子音の変換形があるとし、あるいは共通の子音変換形のみを提示したのかもしれないが、それぞれ対応する一対の単語例のみを挙げているが、その意図するところは全く不明である。実際にはお互いの子音変換形は同種のものばかりではなく、そのほかに多くのお互いに異なる子音変換形があるが、その点に関しては後述されてはいるものの、その数はあまり多くない。また変換形のほとんどが古代日本語に一般に起こらないものや古代日本語には存在せず方言形としてだけのものなどがあり、その区別を全くしていない。さらに方言形を取った場合には、その変換形がその方言の中で二次的に発達したものなのかまたは古代日本語の残存した形なのかは判然としないので、交換形と言えるかどうか大きな問題となる。

同様に Ahlberg は母音の変換形を扱っているが、シュメール語と日本語（OJ, SJ, DJ）とを次のように対応させているが、これはあまりにも乱暴な音韻対応だと言わねばならない。古代日本語を考えた場合、母音は

8つあり、その8つの母音に対応しない母音はどのように対応するのか全く不明であり、

S. /a/ : J. /a/ S. /e/ : J. /e/ S. /i/ : J. /i/ S. /u/ : J. /u/時に/o/

また方言を取った場合でもその方言によって母音数と音価は非常に異なり、どの方言形とを比較するのかなどの詳細な点に触れられていないため、この比較そのものがあまり意味をもたなくなってくると同時にこの音韻対応そのものの信憑性が非常に薄い。それぞれの対応母音をもつ形態素を数多く挙げ、その音素の出現率や交換形の生産性なども考慮したうえでこの対応を考えるべきであった。

Ahlberg は一般に日本語 (OJ, SJ, DJ) では/a/は/o/, /u/と交換しないと考えているようで、「例外として/a/, /o/, /u/の変換形がすこしある」と述べているが、これは次の2点で誤りである。その1つ目は特に古代日本語においては/a/と/ö/の変換形は数多く存在しているので、この変換形は例外ではない。また2つ目として Ahlberg は現代日本語/o/を使用して、この現代日本語との変換形を追求してもあまり変換形を発見できないだろうということと共に/a/と/ö/との変換形を追求すべきであった。

シュメール語	日本語
/l/ : /r/	...
/n/ : /r/	/n/ : /r/
/l/ : /r/	...
/ʃ/ : /n/	/ʃ/ : /n/
/l/ : /ʃ/	/r/ : /ʃ/

さらに子音の中でも特に流音/r, l/, 鼻音/n/, 摩擦音/ʃ/を取り上げ上記のような変換形があることを主張した。しかし、これらの変換形の出現率は全く触れられていないし、例えば、日本語の/ʃ/ : /n/と

いう変換は古代日本語では例外的な交換であって、1例のみを例示しただけで、その交換が一般的に行われていたかのような印象を与え、事実を歪曲しているように見える。

古代日本語では語中の/g/は常に/ng/であり、これは/m/と交換することはないが、/n/とは形成過程で共通した部分があったものと考えられる。しかし Ahlberg は現代日本語の/g/を考えているようであり、/g/と/ng/は個人差によるものであるとしている。これは比較言語学の基本である「最も古い形態を比較する」ということを忘却したものである。

Ahlberg はシュメール語は日本語と同様母音終わりの開音節であると述べているが、そこに示された例の多くの語根は子音終わりの閉音節である。下記のように属格接辞の

- 1) -C + a K + C → -C a C -
- 2) -C + a K + V → -C a k V -
- 3) -V + a K + C → -V C -
- 4) -V + a K + V → -V k V -

-a kはその直前や直後にくる形態素の頭音や末音により、この属格接辞の子音や母音が脱落するという現象はとりもなおさずシュメール語の中に音節の体系としてCVC型の閉音節が存在しているということであって開音節が本来の型ではなく閉音節が本来の型であろう。このように Ahlberg はシュメール語は開音節であると主張しながらも、それを反証するような例示をし、最後には2つの音節形態が共存するという事実はあまり重要ではないと自分の主張と矛盾するような言い方をしている。その理由にシュメール語と同様に日本語の方言にも同じように子音終わりの閉音節をもつ形態素が存在するという事を挙げている。しかし、そう言った方言形はその方言内での二次的発達かどうか検討せずに例示しているのが根本的な問題点となる。

また、古代日本語の4段活用の動詞の中には子音終わりと母音終わりの語根があり、その点を見ると確かに古代日本語以前は現代日本語に見られるような完全な開音節の言語ではなかったと思われる。Ahlbergはその点には全く触れず方言形だけを提示したという誤った理由で自分の主張をしたのである。

(次号に続く)